2016年度司書課程主催行事等報告

巻頭言にも述べたように、今年度は、国際的な活動が多く、また学外の各方面と連携しての活動も継続的に行われた。以下、主な行事等を開催日順に整理して報告する。

1. 台湾からのゲストスピーカーの来訪

4月18日（月）、19日（火）の「図書館概論」（担当：中村）において、中華民国・國史館勤務の顔淑娟氏にゲストスピーカーとして、日本語で、台湾の文化、図書館、公務員制度等についてお話いただいた。出席学生は主に1年生であったが、顔氏の日本語にシンプルに驚嘆する者から、いっきに図書館文化の比較への関心を高めた者まで、同氏に宛てたコメント・ペーパーは多様で、本学司書課程のプログラムを開始したばかりの学生たちには大変よい刺激となったことがうかがわれた。

2. Carol Duncan 先生公開講演会

5月26日（木）、アメリカ合衆国ニュージャージー州のラマポ・カレッジ名誉教授のDr. Carol Duncanの講演会を行った。今号に、原文（英語）・翻訳（日本語）の両方で記録を掲載しているので、ぜひお読みください。翻訳は、本学学校・社会教育講座所属の教育研究コーディネーターである佐藤真実子さんと中村で協働して行った。

Duncan先生は、ミュージアム・スタディーズ研究の第一人者で、本学の学芸員課程が招待して5月21日（土）に公開講演会を実施した[1)]。昨年度末、その計画が進んでいたところ、同課程の主任でいらっしゃる川口幸也教授からDuncan先生に図書館に関わる著書（Duncan, Carol G. *A Matter of Class: John Cotton Dana, Progressive Reform, and the Newark Museum.* Pittsburgh, Periscope Publishing, 2008, 226p.）もあることをご教示いただいた。その内容が図書館史においても参考にされるべきものであったので、無理をお願いして、司書課程に対しても講演をしていただくことにしたのである。大変に深遠な研究テーマであり、エネルギッシュで印象的な講演会であった。20世紀初頭は、アメリカ図書館史においてきちんと検討しなければいけない時代であろうし、学内外の関心も高く、参加者60名強と多くの方に講演を聴いていただくことができて、本学司書課程としても2016年度の最も大きなできごとになったと思われる。

3. 連続公開シンポジウム「司書教諭資格付与科目の教育実践を共有する」

昨年度の第1回に続いて、計画していたとおり、第2回～第5回を以下のように実施することができた。第4回と第5回については、大阪教育大学の森田英嗣先生のご協力で、同大学の天王寺キャンパスでの実施が実現し、熱心にこの問題について考えておられる関西の方たちと交流することができた。これらの記録は本誌の別冊として後日、発行したいと考えている。

2016年5月29日（日）13:15 ～ 16:00
　「学校図書館メディアの構成」の教育実践
　パネラー：吉田右子、青山比呂乃、中山美由紀

2016年7月30日（土）13:15 ～ 16:00
　「読書と豊かな人間性」の教育実践
　パネラー：朝比奈大作、野口久美子、平井むつみ

2016 年 9 月 24 日（土）13:15 ～ 16:00
「情報メディアの活用」の教育実践
パネラー：今井福司、中島幸子、森田英嗣
2016 年 11 月 26 日（土）13:15 ～ 17:00
「学習指導と学校図書館」の教育実践
パネラー：足立正治、中村百合子、家城清美

4. 香港への図書館実習生派遣、香港のライブラリアンたちとの交流

8 月 22 日（月）から 9 月 2 日（金）の二週間にわたり、香港聖公會明華神學院（HKSKH Ming Hua Theological College）で、ライブラリアンの Helen Cheung 氏が本学司書課程の図書館実習生をお引き受けくださり、3 名の学生が参加した。8 月 19 日（金）に中村を含めて 4 名で香港に飛び、9 月 3 日に実習生 3 名揃って無事帰国した。学生 3 名は同神学院の寮に滞在した。この実習については、神学院内の実習以上に、香港での各種図書館の見学、ライブラリアンへのインタビューの機会が多く用意されており、週末には学生たちの希望に Cheung 氏らが応じる形でマカオにも遠征したということであった。Cheung 氏には、実習生の 2 週間の滞在中、本当に細やかな心配りをしていただき、ここに記して改めて心からの感謝の気もちをお伝えしたい。彼女のプロフェッショナルな態度、判断はいっしょに仕事をするに際していつも気もちがよく、自分が何のために仕事をしているのかを思い出させてくれる。彼女と、同神学院との連携は、来年度以降も継続を希望している。実習中、実習後、学生 3 名のそれぞれが、さまざまな思考をめぐらせて香港での英語を使った実習、滞在を終えたことは、提出された図書館実習記録に読み取ることができた。代表として米川なつみさんに、今号に実習にこれから行く後輩への短文を寄せてもらった。この実習生派遣については、広報課が発行する季刊誌『立教』の 238 号（2016 年 11 月 7 日発行）にも報告記事が掲載された。

また、12 月 3 日（木）、Cheung 氏を筆頭に、香港のライブラリアン、図書館情報学教員のグループが本学の図書館の見学に来訪された。終了後、昼食をキャンパス内の松本楼でごいっしょした。このご来学に際し、図書館長の豊田由貴夫先生、利用支援課の原修課長をはじめとする図書館の方たち、学校・社会教育講座の委員長の西原廉太先生、事務室の佐藤哲哉課長にも大変お世話になった。この場を借りて改めて御礼を申しあげたい。

年明け、2017 年 1 月 11 日（水）には、図書館実習生と共に中村も夏にお会いすることができていた Dr. Dickson CHIU Kak Wah（趙格華博士）に本学にいらしていただくことができた。「図書館サービス概論」（担当：上田修一教授）のゲストスピーカーとして香港大学図書館のサービスの紹介をしていただき、授業後には、学内の有志に対して、「現代の香港の大学図書館と香港大学の図書館情報学教育・研究」についてお話いただいた。後者に参加した、本学図書館の小泉徹氏から、今号に報告を寄せていただくことができた。お忙しい中でのご寄稿に感謝いたします。

5. 宮城県気仙沼市、岩手県盛岡市・山田町訪問

今年度も、文学部教育学科の河野哲也教授のプロジェクト（「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」；社会技術研究開発センター（Ristex）による助成を受けたプロジェクト）に、司書課程からもさまざまな形で参加させていただいた。

中でも大きかった成果は、本学司書課程兼任講師の柳瀬寛夫先生（図書館施設論）のご紹介で、10 月 30 日（日）に「気仙沼てつがく探検隊」を実施することができたということ

である。この探検隊は、屋外でのフィールドワークののち哲学対話の場をもち、最後は公共図書館での探索を行うというもの。フィールドワークは環境教育の専門家、哲学対話は哲学実践の専門家、そして図書館での探索は司書らがリードし、活動の中心は自主的に集った小・中学生である。香港から香港聖公會明華神學院の院長である Gareth Jones 氏が、またスペインから来日していた Joan Portell Rifà ご夫妻も加わってくださり、子どもたちとの交流は国際的なものとなった。第 2 回は 2017 年 3 月 19 日（日）に行われた。気仙沼には、河野先生のご理解を得られ、司書課程修了生で今年度も自主的に「図書館総合演習」（担当：中村）に参加していた、福井夏海さんを二度にわたり派遣することができた。第 2 回には、同じく司書課程修了生で今年度も自主的に「図書館総合演習」に参加していた小出晋之将さんにも参加してもらうことができた。

岩手県立図書館の澤口祐子氏のご紹介で、山田町立図書館でも、来年度から同種のプロジェクトが行われることが決まっている。3 月 4 日（土）に哲学対話の機会が試行的にもたれ、小出さんはこちらにも参加した。来年度は隔月実施とのこと。プロジェクトの進展が楽しみであり、司書課程の学生たちにもぜひ継続的に参加してもらって、図書館の社会的な意義についての検討を深めていきたい。今号には、気仙沼でのプロジェクトについて、福井さんと小出さんから報告を寄せてもらった。

6. Joan Portell Rifà 先生講演会

2017 年 1 月 23 日（月）には、スペイン・バルセロナから本学文学部に客員研究員としていらした Dr. Joan Portell Rifà の講演会を実施した。こちらも、今号に、原文（カタルーニャ語）・翻訳（日本語）の両方で記録を掲載しているので、ぜひお読みいただきたい。カタルーニャ語の原稿は、日本・スペイン文化経済交流センター エクステンションに、日本語に翻訳していただいた。

Portell 先生については、2016 年度末に、同氏が非常勤講師として勤めるバルセロナ自治大学のスタッフを介して中村にファースト・コンタクトがあった。児童文学研究者であり、バルセロナで児童・青少年文学の評論家、また著者として名高い方の受入に、本学が国内で最も適切かどうかと当初は思案した。しかし調べていくうちに思いのほか本学の客員研究員受入態勢が他大学と比較して整っているらしいことがわかって、覚悟を決めて、本学文学研究科にいらしていただくことにした。10 月末から 1 月下旬までの日本滞在中に、安曇野、気仙沼、都内では板橋区立図書館、国立国会図書館国際子ども図書館をはじめとする各種図書館、児童書出版社等を精力的に訪問され、多くの人と交流され、日本の子どもの読書と読書推進活動の実態についての理解を深められ、その経験は随時、カタルーニャ語でブログで発信しておられた。本学司書課程の「図書館総合演習」では 2 度にわたりゲストスピーカーとして学生に講義をしていただいた。また、板橋区では、本学司書課程非常勤講師の柳瀬寛夫先生のご紹介で、区立保育園でカタルーニャ語の絵本の読み聞かせをし、区立図書館では職員の方たち 20 数名ほどに対して講演をされた。

公開講演会は、児童文学に関心をもつ、より多くの聴衆を得たいという思いから、白百合女子大学司書課程の今井福司先生にご相談し、本学司書課程は後援にまわり、白百合女子大学で主催、実施していただいた（通訳費用、会場等もご負担いただいた）。年明け 1 月下旬で学期末だったために学生の集りが良くなかったが、テーマに強い関心をもつ研究者等が集り、熱い質疑応答が行われ、参加者約 20 名と小規模に終ったものの、参加者一同が充実した思いで会場を後にできたのではないかと思う。当日の通訳は日本・スペイン文化経済交流センター エクステンション代表の Montserrat Marí 氏にお引き受けいただいた。大変すば

らしい、プロフェッショナルなお仕事だった。今井先生と Marí 氏にはここに記して心からの感謝をお伝えしたい。

以上のほか、年度末の 2017 年 3 月 8 日（水）には、兼任講師懇談会を実施した。兼任講師 9 名、本学司書課程関係者 4 名の合計 13 名の出席を得て、司書課程の教育の課題等についての意見交換をすることができた。

授業内での図書館等の訪問は、小田光宏先生の「図書館基礎特論」で 7 名が参加し、8 月 5 日（金）に海老名市立中央図書館を訪問、小泉世津子先生の「情報メディアの活用」で 4 名が参加し、12 月 3 日（土）に NHK 放送センターのスタジオ見学が行われた。学生の参加は任意としているが、登録学生のほとんどが参加している。また「図書館総合演習」では、授業日を変更して、Portell 先生や Dickson 先生のレクチャを受ける機会を設けたが、少人数で、英語で図書館や読書活動、情報探索行動等について意見交換をするという、学生にとっては貴重な、挑戦的な機会を提供することができた。「図書館総合演習」は新規登録者数は毎年、残念ながら低調であるが、熱心な学生が集り、過年度生も自主的に参加しており、濃い異学年交流が行われている。

いっぽうで、図書館実習の参加希望者が近年、減少していることを受け、来年度から、本学司書課程図書館司書コースについて、図書館実習の先修規定を下記の表に示すように緩めることを決定した。【先修科目】は前年度までに単位修得が必要で、【準先修科目】は実習に行く年の春学期までの履修を求めている。

＜旧＞ 2016 年度まで		＜新＞ 2017 年度以降
【先修科目】 「図書館概論」 「図書館情報技術論」 「図書館サービス概論」 「情報サービス論」 「情報サービス演習 1」 「情報サービス演習 2」 「図書館情報資源概論」 「情報資源組織論」 「情報資源組織演習・分類」 「情報資源組織演習・目録」	⇒	【先修科目】 「図書館概論」 「図書館サービス概論」 「情報サービス論」 「情報サービス演習 1」 「情報サービス演習 2」 「図書館情報資源概論」 「情報資源組織論」
【準先修科目】 希望館種により、指定とする。 ・学校図書館希望者「学校経営と学校図書館」 ・公共図書館希望者「児童サービス論」	⇒	【準先修科目】 「図書館情報技術論」 以下、希望館種により、指定とする。 ・学校図書館希望者「学校経営と学校図書館」 ・公共図書館希望者「児童サービス論」

図書館実習希望者減少の背景には、学部の各種プログラムの充実があるように思われる。また、授業の時間割の重複が起きて、司書課程科目を 4 年生になるまで履修しなければならない学生が増えている。図書館実習に、なるべく 3 年生で行くことができるようにしたいと考えた。そのほうがキャリアについて考える際にも有用であろう。しかし、もちろん、受入側の立ち居場に立ってみれば、一定の知識がないことは大いに憂慮されるだろう。きめ細

やかな事前指導によってできるかぎりの準備をしたいと思っている。受入館の皆さまにおかれましては、ご指導にますますのご負担をお願いすることになりますが、忌憚なくご意見お寄せいただき、本学の司書課程の教育の充実に引き続きお力をお貸しいただきたく存じます。

（文責・中村百合子）

[1)] その記録は、本学学芸員課程紀要『Mouseion』No.62, 2016, p.1-16 に掲載。学芸員課程主任の川口幸也教授による解説が記録に続いて掲載されている（「美術館という儀礼の場：キャロル・ダンカン氏の研究から」, p.17-18）。